第8回 数理統計 レポート

小森 一輝

2020年11月20日

定義 3.9. 期待值

i) 確率変数 X が離散型の場合, X の確率関数 f_X が $\sum_{i=1}^{\infty} |x_i| f_X(x_i) < \infty$ $(D = \{x_i|i=1,2,\dots\})$ を満たすとき, X の期待値 (expected value) μ を次式で定義する.

$$\mu = E(X) = \sum_{i=1}^{\infty} x_i f_X(x_i)$$

ii) 確率変数 X が連続型の場合, X の確率変数 f_X が $\int_{-\infty}^{\infty} |x| f_X(x) dx < \infty$ を 満たすとき, X の期待値 μ を 次式で定義する.

$$\mu = E(X) = \int_{-\infty}^{\infty} x f_X(x) dx$$

確率変数 X の期待値は平均値 (mean) と呼ばれることもある.

- 注

常に期待値は存在するとは限らない.

E_{分布を表す}(確率変数)

 $E_{\mathbf{X}}(\mathbf{X}) = \int x f_{\mathbf{X}}(t) dt$

定理 3.18. X,Y を確率変数とし,Y=h(X) とする.ただし, $h:\mathbb{R}\to\mathbb{R}$ は微分可能な単調関数とする. このとき, $E(Y)<\infty$ であれば,以下が成り立つ.

$$E(Y) = E(h(X))$$

命題 3.19. 期待値の性質

 $\phi,\psi:\mathbb{R}\to\mathbb{R}$ をボレル関数とし, $a,b\in\mathbb{R}$ を定数とする. このとき, $E(\phi(X))<\infty$, $E(\psi(X))<\infty$ であれば, 以下が成り立つ.

$$E(a\phi(X) + b\psi(X)) = aE(\phi(X)) + bE(\psi(X))$$
$$|E(\phi(X)| \le E(|\phi(X)|)$$

Proof. 離散型

$$E_X(a\phi(X) + b\psi(X)) = \sum_{i=1}^{\infty} (a\phi(X) + b\psi(X)) f_X(x_i)$$
$$= a\sum_{i=1}^{\infty} \phi(X) f_X(x_i) + b\sum_{i=1}^{\infty} \psi(X) f_X(x_i)$$
$$= aE(\phi(X)) + bE(\psi(X))$$

Proof. 連続型

$$E_X(a\phi(X) + b\psi(X)) = \int (a\phi(X) + b\psi(X))f_X(x_i)$$
$$= a \int \phi(X)f_X(x_i)dx + b \int \psi(X)f_X(x_i)dx$$
$$= aE(\phi(X)) + bE(\psi(X))$$

Proof.

$$\left|\sum f(x_i)\right| \le \sum |f(x_i)|$$

$$\left|\int f(x_i)\right| \le \int |f(x_i)|$$



定義 3.10. 分散, 標準偏差

i) 確率変数 X が離散型の場合, X の確率関数 f_X が $\sum_{i=1}^{\infty} x_i^2 f_X(x_i) < \infty (D = \{x_i \mid i=1,2,\dots\})$ を満たすとき, X の分散 (varaiance) を次式で定義し, σ^2 と記す.

$$\sigma^2 = V(X) = E((X - \mu)^2) = \sum_{i=1}^{\infty} (x_i - \mu)^2 f_X(x_i)$$

ii) 確率変数 X が連続型の場合, X の確率密度関数 f_X が $\int_{-\infty}^{\infty} x^2 f_X(x) dx < \infty$ を満たすとき, X の分散を次式で定義し, 同じく σ^2 と記す.

$$\sigma^2 = V(X) = E((X - \mu)^2) = \int_{-\infty}^{\infty} (x - \mu)^2 f_X(x) dx$$

iii) 確率変数 X の標準偏差 (standard deviation) を次式で定義し, σ と記す.

$$\sigma = \sqrt{V(X)}$$

すなわち、標準偏差は分散の正の平方根である.

例 3.4. 確率変数 X の期待値、分散について、次式が成り立つ.

$$E(aX+b) = aE(X) + b, \qquad V(aX+b) = a^2V(X)$$

$$V(X) = E(X^2) - (E(X))^2$$

Proof.

連続型

$$E(aX + b) = \int (ax + b)f(x)dx$$
$$= a \int xf(x)dx + b \int xf(x)dx$$
$$= aE(X) + b$$

※離散型も同様

Proof.

$$V(aX + b) = E((aX + b - E(aX + b))^{2})$$

$$= E((aX + b - aE(X) + b)^{2})$$

$$= E(a^{2}(X - E(X))^{2}) = a^{2}E((X - E(X))^{2}) = a^{2}V(X)$$

Proof.

$$\begin{split} V(X) &= E((X - E(X))^2) \\ &= E(X^2 - 2XE(X) + (E(X))^2) \\ &= E(X^2 - 2E(X)E(X) + (E(X))^2) \\ &= E(X^2) - (E(X))^2 \end{split}$$

例 3.5. 確率変数 X の期待値, 分散について, 次式が成り立つ.

$$E(X - \mu) = 0$$

 $E((X - c)^2) \ge E((X - \mu)^2) = V(X)$ $(c \in \mathbb{R})$

Proof.

$$E(X - \mu) = E(X) - \mu$$
$$= \mu - \mu = 0$$

Proof.

左辺 - 右辺 =
$$E((X-c)^2) - E((X-\mu)^2)$$

= $E((X-c)^2 - (X-\mu)^2)$
= $E(-2cX + c^2 + 2\mu X - \mu^2)$
= $(-2c + 2\mu)E(X) + c^2 - \mu^2$
= $-2c\mu + 2\mu^2 - \mu^2 + c^2 = (c-\mu)^2 \ge 0$
等号成立は $c = \mu$

・補足
$$-$$
ボータで以下のようにあらわすことができる。 $\sum (x_i-\overline{x})=0$ $\sum (x_i-c)^2 \geq \sum (x_i-\overline{x})^2$

定義 3.11. 積率

確率変数 X について, ある $n \in \mathbb{N}$ に対し, $E(X^n) < \infty$ であれば,

 $E(X^n)$ を原点まわりの n 次積率 (nth moment about the origin), または、| 原点積率 |(nth origin moment) と いう.

さらに、ある $\mu=E(X)$ が与えられるとき, $E((X-\mu)^n)$ を平均周りの n 次積率 (nth moment about the mean), または、中心積率 (nth central moment) という.以下, $\mu_n = E(X^n), \ \mu'_n = E((X-\mu)^n)$ と記す

補足

原点まわりの
$$n$$
 次積率 : $\mu_n'=E(X^n)$ 平均まわりの n 次積率 : $\mu_n=E((X-\mu)^n)$ $\mu_1'=E(X)=\mu$ $\mu_2=V(X)=\sigma^2$

定理 3.20. 積率の存在

確率変数 X および, $n(\in \mathbb{N})$ に対して, $E(X^n) < \infty$ が成り立てば, $0 < k \le n$ に対して, $E(X^k)$ が成り立つ. つまり, n 次の積率が存在すれば, n 次以下の積率も存在する.

$$\int |x^n|f(x)dx < \infty \to \int |x^k|f(x)dx < \infty$$

命題 3.21. 確率変数 X の積率に関して, 次式が成り立つ.

(平均積率を中心積率で表す!!)

$$\mu_2 = \mu'_2 - (\mu'_1)^2$$

$$\mu_3 = \mu'_3 - 3\mu'_1\mu'_2 + 2(\mu'_1)^3$$

$$\mu_4 = \mu'_4 - 4\mu'_1\mu'_3 + 6(\mu'_1)^2\mu'_2 - 3(\mu'_1)^4$$

Proof.

$$V(X) = E(X^{2}) - (E(X))^{2}$$
$$= \mu'_{2} - (\mu'_{1})^{2}$$

Proof.

$$\begin{split} \mu_3 &= E((X-\mu)^3) \\ &= E(X^3 - 3X^2\mu + 3X\mu^2 - \mu^3) \\ &= E(X^3) - 3\mu E(X^2) + 3\mu^2 E(X) - \mu^3 \\ &= \mu_3' - 3\mu_1'\mu_2' + 3\mu_1'^2\mu_1' - \mu_1'^3 \\ &= \mu_3' - 3\mu_1'\mu_2' + 2\mu_1'^2 \end{split}$$

定理 3.22. 平均まわりの積率と原点まわりの積率の関係

平均まわりの積率 μ_k と、原点まわりの積率 μ'_k には以下の関係が成り立つ.

$$\mu_{k} = \sum_{i=1}^{k} (-1)^{k-i} \binom{i}{k} \mu'_{i} (\mu'_{1})^{k-i}$$

$$\mu'_{k} = \sum_{i=1}^{k} \binom{i}{k} \mu_{i} (\mu'_{1})^{k-i}$$

ここで、() は二項係数を表し、形式的に $0! = 1, \mu'_0 = 1$ を仮定している.

Proof.

$$\mu_k = E((X - \mu)^k) = E(\sum_{i=1}^k (-1)^{k-i} \binom{i}{k} X^i \mu^{k-i})$$

$$= \sum_{i=1}^k (-1)^{k-i} \binom{i}{k} E(X^i) (\mu_1')^{k-i}$$

$$= \sum_{i=1}^k (-1)^{k-i} \binom{i}{k} \mu_1' (\mu_1')^{k-i}$$

Proof.

$$\begin{split} \mu_k' &= E(X^k) \\ &= E((X - \mu + \mu)^k) \\ &= \sum_{i=1}^k \binom{i}{k} E((X - \mu)^i) \mu^{k-i} \\ &= \sum_{i=1}^k \binom{i}{k} E((X - \mu)^i) (\mu_1')^{k-i} \\ &= \sum_{i=1}^k \binom{i}{k} \mu^i (\mu_1')^{k-i} \end{split}$$

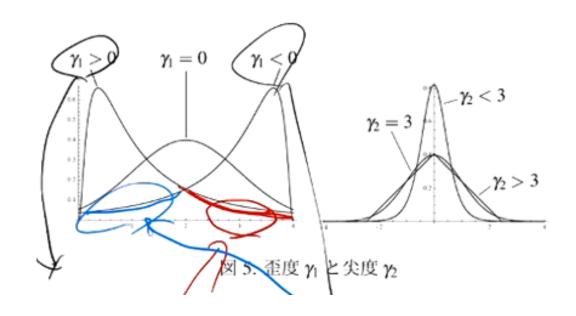
. 補足

$$\left(\begin{array}{c}i\\k\end{array}\right) =_k C_i$$

定義 3.12. 歪度と尖度

確率変数 X について, $E(X^4)<\infty$ のとき, X の**歪度** (skewness) γ_1 および, **尖度** (kurtosis) γ_2 を以下の式で定義する.

$$\gamma_1 = E\left(\left(\frac{X-\mu}{\sigma}\right)^3\right) = \frac{\mu_3}{(\mu_2)^{2/3}}, \qquad \gamma_2 = E\left(\left(\frac{X-\mu}{\sigma}\right)^4\right) = \frac{\mu_4}{(\mu_2)^2}$$



定義 3.15. 標準化

確率変数 X について, $E(X) = \mu$, $V(X) = \sigma^2(\sigma > 0)$ とする.このとき, 変換

$$Z = \frac{X - \mu}{\sigma}$$

を X の標準化 (standardization) とよぶ.

種足
$$E(X) = 0$$

$$V(X) = 1$$

命題 3.24. 標準化された確率変数の期待値, 分散

標準化された,確率変数 Z の期待値 E(Z),分散 V(Z) は以下で与えられる.

$$E(Z) = 0, \qquad V(Z) = 1$$

Proof.

$$E(Z) = E\left(\frac{X - \mu}{\sigma}\right)$$
$$= \frac{1}{\sigma}(E(X) - \mu) = 0$$

$$V(Z) = E\left(\left(\frac{X-\mu}{\sigma}\right)^2\right)$$
$$= \frac{1}{\sigma^2}E((X-\mu)^2)$$
$$= \frac{\sigma^2}{\sigma^2} = 1$$

また, Z を変換した確率変数 $X = \mu + \sigma Z$ の期待値 E(Z), 分散 V(Z) は以下で与えられる.

$$E(Z) = \mu, \qquad V(Z) = \sigma^2$$

Proof.

$$\begin{split} X &= \mu + \sigma Z \\ E(X) &= \mu + \sigma E(Z) = \mu \qquad (\because E(Z) = 0) \\ V(X) &= \sigma^2 V(Z) = \sigma^2 \qquad (\because V(Z) = 1) \end{split}$$

定義 3.16. スチューデント化

確率変数 X について, $E(X) = \mu$, $V(X) = \sigma^2(\sigma > 0)$ とする.このとき, 変換

$$T = \frac{X - \mu}{\sqrt{Y}}$$

を X のスチューデント化 (studentization) とよぶ.ただし, Y は, $Y \xrightarrow{P} \sigma^2$ を満たす確率変数であ る.

定義 3.17. 積率母関数 とキュムラント母関数

確率変数 X について, $E(e^{tX})$ $< \infty$ が t の原点を含むある区間 I で成り立つとする. この区間で定 義される t の関数

$$m_X(t) = E(e^{tX}) \qquad (t \in I)$$

を X の積率母関数 (moment generating function) とよぶ. さらに,

$$\Psi_X(t) = logm_X(t) \qquad (t \in I)$$

をキュムラント母関数 (cumulant generating function) とよぶ.

定理 3.25. 確率変数 X について, $E(X^n) < \infty$ ならば, X の積率母関数について以下が成り立つ. (使い方のみ)

$$\left. \frac{d^k}{dt^k} m_X(t) \right|_{t=0} = E(X^k) = \mu'_k \qquad (k = 1, 2, \dots n)$$

定理 3.26. 積率母関数の一致性

2 つの確率変数 X_1, X_2 に対して、積率母関数 m_{X_1}, m_{X_2} が存在すると仮定する. このとき、確率分 布 P_{X_1}, P_{X_2} が一致するための必要十分条件は、積率母関数 m_{X_1}, m_{X_2} が一致することである.

ア $_{X_1}$ と P_{X_2} が一致 \leftrightarrow m_{X_1} と m_{X_1} が一致

定理 3.27. 確率変数 X について, $E(X^n) < \infty$ ならば, X のキュムラント母関数に関して,以下が成り立つ.

$$\left. \frac{d^k}{dt^k} \psi_X(t) \right|_{t=0} = \mathcal{K}_k \qquad (k=1,2,\dots n)$$

命題 3.28. 積率母関数、キュムラント母関数の線形変換

 $a,b\in\mathbb{R}$ を定数とし、Y=aX+b とする.このとき、確率変数 X,Y の積率母関数、および、キュムラント母関数に関して、以下が成り立つ.

$$m_Y(t) = e^{bt} m_X(at)$$

$$\psi_Y(t) = bt + \psi_X(at)$$

Proof.

$$m_Y(t) = E(e^{ty})$$

$$= E(e^{t(aX+b)})$$

$$= E(e^{bt} \cdot e^{tax})$$

$$= e^{bt}E(e^{tax})$$

$$= e^{bt}m_X(at)$$

命題 3.29. 積率母関数とキュムラント母関数について, 以下の式が成り立つ.

$$\psi_X'(0) = m_X'(0) = E(X)$$

$$\psi_X''(0) = m_X''(0) - (m_X'(0))^2 = V(X)$$

ここでの,1および,11はそれぞれ,1階微分,2階微分を表している.

定理 3.37. マルコフの不等式 (Markov's inequality)

 $h: \mathbb{R} \to \mathbb{R}$ を非負関数とする. 確率変数 X について, $E(h(X)) < \infty$ ならば, 任意の $\epsilon > 0$ に対して,

$$P(h(X) \ge \epsilon) \le \frac{E(h(X))}{\epsilon}$$

が成り立つ. この不等式において,X を X-E(X) で置き換え, $h(X)=x^2,\epsilon=a^2$ とした

$$P(|X - E(X)| \ge a) \le \frac{V(X)}{a^2}$$

はチェビシェフの不等式 (Chebyshev's inequality) とよばれる.

Proof.

$$E(h(X)) = \int_{-\infty}^{\infty} h(x)f(x)dx \ge \int_{h(x) \ge \epsilon} h(x)f_X(x)dx$$

$$\ge \int_{h(x) \ge \epsilon} \epsilon f_X(x)dx$$

$$= \epsilon \int_{h(x) \ge \epsilon} f_X(x)dx$$

$$= \epsilon P(h(x) > \epsilon)$$

定理 3.38. ジャンセンの不等式 (Jensen's inequality)

(凸関数と期待値の関係)

 $g: \mathbb{R} \to \mathbb{R}$ を凸関数とする. 確率変数 X について, $E(X), E(g(X)) < \infty$ であれば,

$$g(E(X)) \le E(g(X))$$

が成り立つ. ここで, 区間 I で定義された実数関数 g が凸関数であるとは, $a,b \in I, t \in (0,1)$ について,

$$g(ta + (1-t)b) \le t(g(a)) + (1-t)g(b)$$

が成り立つことである.

定理 3.39. ヘルダーの不等式 (holder's inequality)

(コーシーシュワルツの一般形)

確率変数 X,Y について, $E(|X|^p)$, $E(|X|^q) < \infty$ であり, 1 であれば,

$$E(|XY|) \le (E(|X|^p))^{1/p} (E(|Y|^q))^{1/q}$$

が成り立つ./;この不等式において,p=q=2とした

$$\underline{(E(|XY|))^2 \leq E(X^2)E(Y^2)}$$

は、**コーシーシュワルツの不等式 (Cauchy-Schwarz inequality)** とよばれる.

定理 3.40. ミンコフスキーの不等式 (Minkowski's inequality)

確率変数 X, Y について, $E(|X|^r)$, $E(|Y|^r) < \infty$ であり, $1 \le r < \infty$ であれば,

$$(E(|X+Y|^r))^{1/r} \le (E(|X|^r))^{1/r} + (E(|Y|^r))^{1/r}$$

が成り立つ.

定理 3.41. リアプノフの不等式 (Lyapunov's inequality)

確率変数 X について, $E(|X|^q) < \infty$ であり, 1 であれば,

$$(E(|X|^p))^{1/p} \le (E(|X|^q))^{1/q}$$

が成り立つ.